帯大人文社会科学論集，9－1（1994）：15～28

言語表現におけるコンテクストの役割

森　下　　盈
（帯広畜産大学英語学研究室）

1993年10月29日　受理

The Role of Context in Linguistic Expressions

Mitsuru MORISHITA

（序）

Walpole が彼の著書“Semantics”のなかで次のように述べている。“The context of anything is the frame or field or setting in which it exists.”[1] 我々が話すことば，事柄は不可避的に context と共に存在し，それによって意味をもたされている。このことの重要性は S.I.Hayakawa の次のことばにも現れている。“Interpretation must be based on the tolality of contexts.”[2] 我々が相手の話していることをよりよく理解するためには，彼の発した発話に関係している context をよく把握することが必要条件であり，それを理解すること自体が相手の発話を理解することでもある。特定の発話の context を理解していなければ曲解や誤解などが生じ，一方的な解釈に陥ることがある。“the totality of contexts”を構成するものは（1）verbal contexts（ことば上のコンテクスト）（2）physical contexts（物理的コンテクスト）（3）psychological contexts（心理的コンテクスト）である。これら三種のコンテクストは必ず独立して起こるというものではなく，時にそれらが合体して聞き手の理解を助ける。

（I）

先ず，verbal contexts から見てみよう。辞書を編さんするにあたって編者

は歴史にあらわれた作家，詩人，歴史家等の文献から，ある特定の語が使用されている文章を見つけ，それらを収集する。その語を吟味し，調査して，一つの辞書にその結果出てきた意味を記す。このようにして，この場合，具体的に生起した文章が辞書編さんにとって大きな役割を担い，語の意味を知らしめる verbal contexts を形成している。

もう一つの例を見てみよう。我々が"oboe"ということばを聞いたことも，見たこともないとして，次のような発話がなされている場面に出会ったら，どうであろうか。

"He used to be the best "oboe"player in town. ——Whenever they came to that "oboe"part in the third movement, he used to get very excited. ——I saw him one day at the music shop, buying a new reed for his "oboe"——He never liked to play the clarinet after he started playing the "oboe". —He said it wasn't much fun, because it was too easy."

我々はこの発話のなかに"oboe"ということばが四度使われているのを見る。たとえ"oboe"の意味を知らなくとも，この発話を聞くにつれて，徐々にその意味が明らかになってくる。最初の文の"oboe"player ということばを聞いて，我々はもし"a violin player"とか，"a guitar player"，或いは"a ball player"ということばを聞いたことがあるなら，"Oboe"is played."ということを知る。ここで，それは楽器かゲームのどちらかであることが分かる。第二の文で"oboe"が play されたとき人を楽しませ，興奮させる特質をもっていることが分かる。第三の文でそれの部分品が楽器店で売られていることが知られ，次には clarinet ということばが来るので，ゲームではないかという思いが遠のき，"oboe"はある楽器を意味することが判明する。

このように，この場合，実在物を verbal contexts によってその意味を悟ったのであるが，この語は明らかにかたちを持つ指示物（referent）である。意味が全く把握できないもので，はっきりしたかたちを有する対象を示さない，性状を表す形容詞とか副詞，或いは，多くの意味や包括的概念を有する抽象語においては，このような verbal contexts のはたらきは力が弱いことはあろう。

上の例の場合，“oboe”という語が話題の中心であり，その意味を理解しようとしている聴者にとっては彼の注意を最も惹くものである。彼が，“oboe”の意味を正しく汲み取るために必要なことは，それ以外の語が，完全にという訳ではないが，よく理解されていなければならないということである。とり分け，“play”ということばと“musical”ということばの意味を心得ていることが重要である。これらの語が上の例文が示す context のなかで中心的な役割をもち，聞き手が context を理解するために必須のものとなっている。このように，聞き手が伝達行為に現われる発話内容を十分に把握することは，それが示すコンテクストを理解すると同時に，その内容を構成している主要語の意味を把えることができなければならないということである。

“oboe”の意味を理解するということは，勿論それのすべてを理解するということではない。この理解については，“oboe”がどんな物で作られており，どんな音色を出し，どんな楽器の種類に入るか，大きさはどうか，等々というような細部にわたりそれの意味を理解するということは必ずしも意図されていない。上の例文で理解されたことは，“oboe”が楽器であるということであり，それ以外は殆ど理解されていない。しかし，だからと言って，context が不完全だと述べることは当を得ていない。ただ，実際に生起する context が不完全な役割を果たさざるを得ないということに過ぎない。もし，“oboe”の完全に近い程の意味を知りたければ，そのつとめをするだけの context を我々が作り上げるということは決して不可能とは言えない。だが，それは必要のないことである。何故ならば，我々のコミュニケーションは，言葉の完全な，それが含むすべての意味を要求するものではなく，常にそれについての限られた知識のもとで行われるからである。また，それ故にこそコミュニケーションの意義があると言えるからである。

次に，連続的発話により成り立つ context ではないが，意味の分からない語がそれを示されることにより，その意味がはっきりしてくる例を挙げてみよう。

(1) He seems to be perpetually wanky.

(2) Some people feel most wanky in the early morning, but I get that way

just before supper.

(3) If you want to get over that wanky feeling, take Johnson's Homogenized Yeast Tablets.

(4) Everybody feels more or less wanky on a hot, humid day.

この"wanky"という語は多くの辞書には載っていないものであるが，上の四つの文は徐々に我々にその意味を知らしめる。(1) の文だけを見ては意味がはっきりしないが，語配列により，つまり，"be wanky"であって"be a wanky"でもなく，"be wankies"でもないことにより，その語が明確な可視的実在を示すのではなく，様態とか性状を示す何かではないかということを暗示する。このことは次の文の"most wanky"という補語ではっきりし，"feel"により心理に起こる何物かを示すことが察せらるし，"take … tablets"によってその心理状態がかんばしくない，不快なものであることが解せられる。ここでも我々は"wanky"の完全な意味を把握できないけれども，verbal context が我々に未知の語の意味を理解せしめるということをくつがえすものではない。

第一の例では，我々はあの発話を耳で聞いたということを仮定し，第二の例では意味を知ろうとする人が文字を見て判断する場合を述べたものであったが，両者のあいだに我々が理解しようとするときさして重要な差異はない。しかし，文字の場合の方がゆっくりと判断できるということは言うまでもない。前者のように聴覚を通して言葉の意味をつかむことは人間が音声による発話が行われている場面を通して言語を獲得して行く過程と同じである。しかし，幼児の場合は，実在物の助けを借りて言葉を獲得してゆくことが多いことから考え，physical context がこのとき大きな役割を果たしていると考えなければならない。

ことばによる表現はそのことばが持つ以上のことを理解しなければ真意を把握できないことがある。"He hasn't washed himself for a month."という表現を聞いたとき，或いは見たとき，恐らくたいていの人は「何と不潔な男だ」と感じるであろう。しかし，"Water, for troops fighting in the desert in world war II had to be conserved for drinking and for vehicles"という理由

があり，contextがあれば先の反応とは異なったものが生ずるはずである。前の二つの例では未知の語を知るという点で，verbal contextのはたらきが認められたのであるが，ここでは，より大きな単位としてのsentenceを正しく理解するためにcontextが関係していることを知るのである。

同じ発音をもち，語源も同じと考えられる語が，それの用いられるcontextにより明らかに意味の違いが起こる事実をみたい。既に述べたように，用いられる語は必ずそれぞれ異なった環境，situationと共に起こるのであるから，その点では同一の発音をもち，語源も同一である語が意味の差異をもって用いられたと言えるのであるが，ここでは所謂"shift"が行われたということでその問題を取り扱う。

(1) The building of the stadium took three years.

(2) The building which was completed in 1897 still stands.

(1) のsentenceでは"building"ということばが，"act of building"或いは"the building process"を指している。(2) では，それは"finished building"を指している。次に"case"という語が次のように用いられた場合はどうであろうか。

(1) a case of diphtheria

(2) the case for birth control

(3) in case of fire

(1) は"A case is an example of disease.", (2) は"A case is a group of arguments in support of a belief.", (3) は"A case is an event."ということになる。これらも"shifted meaning"の例である。

一般に，verbal contextが聞き手，或いは読み手に引き起こすことがらを述べ，それによりコミュニケーションの発話，文章を理解する上に，どのような役割を果たすかを吟味してきたのであるが，Richardsが述べているように，"What a sign or word means is the missing parts of the context."ということである。それ故に，我々が口に出すあらゆることばは，前にそのことが起こった関係適切なcontextのなかのその他のすべての関係適切な要因を意味する。

故に，聞き手に対しある発話がなされるときに，そのことばはそれがあらわれた聞き手の接したことのあるcontextの感じと関係しているのである。また，我々が一定のcontextでことばを使うとき，そのことばについてのすべてを語るわけでもなく，話していることについてもそのすべての詳細を表現しているわけでもない。このように発話者自身も発話に完全性を示すことができないということ，また，そこに使用されることばの理解は聞き手が，そこに用いられている語，それによって示唆されるcontextをどのように把握するかにかかっているので，どの語が聞き手を十分な理解に導くかということは簡単に答えられる問題ではない。そういう意味から考え，我々の発話には「ある陳述をする絶対的に適切な方法」は存在し得ないということになる。

上に述べたことは，また違った表現によって，つまり別の象徴或いはことばを用いて似たcontextを表現できることを示している。たとえば次の二つの文を見てみよう。

(1) In order to promote foreign trade, we must make utmost efforts to export many excellent goods at moderate prices.

(2) It is necessary for us to do our best to export a lot of superior goods at low prices with a view to promoting foreign trade.

これらを比較するとき，同じ語が数カ所に使用されているが，大部分は用語が異なっている。これらを綿密に分析し，発音される語の印象を考慮に入れた際には，差異は勿論あるが，この二文を読者が目にするとき，頭のなかに残っているこれらが示した大きな意味，つまりcontextには変わりがないだろう。

これまで見て来たように，verbal contextは文字通りことばの次元でのそれであり，physical contextとは別のものであることが示されたが，我々がコミュニケーションにあらわれる発話を解釈する場合に，それが正確な表現でなされたとしても，多くの場合physical contextと関係している。言語表現によって伝達が行われたとき，聞き手，或いは読み手はそのことばが具体的な物理的心象を生じせしめるとき，彼らはそのために，より鮮明に理解できるのである。どのような抽象語による表現であろうと，理解する側は具体の集合，或いは総

合としてのそれらを聞き，読みしているのであり，そうである限り，具体的心象は自由に現れてくるものである。たとえそこに使われている語の直接の心象が現れずとも，何か関係のある心象を彼らの心のなかに描くとき，理解はより容易になる。このことは，verbal な面においても，実際面においても経験の浅い者に，より深い意味のある，包括的な話をするときに利用できることがらである。

単語，或いはそれの結合により成り立つ長い発話は，それ自体が“actual phase”から離れていれば本来の姿ではない。“actual phase”を単語，或いは発話自体が示しているかどうかを知るのは，聞き手であり，読み手である。もし彼らのある者が，他の人の見抜くことのできる“actual phase”を見抜くことができなければ，彼はその語，発話自体に対する理解能力が欠けていることを示す。“actual phase”を有することは，客観的見地からみてこの世における意味ある表現であるということであり，言語自体は“actual phase”を持つのだが，より長い構成のなかにあらわれたとき，それを失うことがある。それは前に触れた所謂“nonsensical sentence”である。“Saturday is sleeping”という文において，“Saturday”も，“Sleeping”もそれほど抽象的な語ではない。そのことは“Yesterday was Saturday.”とか“Jack is sleeping.”という文章にあらわれれば一目判然とすることが分かる。しかし，上の最初の構成に現れたとき，我々は突然その全体の意味をとろうとするときに難を感ぜざるを得ない。これは，そのような発話を成せしめた context が広く示されていないということに起因するものではない。それは客観的見地からして“nonsensical”なのである。つまり，それは“actual phase”を欠いている。

この例で分かることは，世に存在している語はそれ自体としては“nonsensical”ではないということであり，それがある context のなかにあらわれ，その全体の意味と関連してくるときに，それ自体が意味をもたなくなるということである。つまり，人間の尋常のこの世の思考を表していない言語表現のなかにあらわれたとき，語が抽象的役割を果たさないどころか，その存在さえも顕示していないといっても差し支えない。

このような観点から言えば，いかに長い構成の発話でもその全体の意味がverbal contextによって理解される限り，そこに用いられている話はactual phaseからの離脱を犯していることにはならぬと結論して構わない。勿論，この場合，その構成の意味を十分に理解できるということを前提にしている。長い言語構成になった場合，それを作っている一語一語の意味をおろそかにしても，全体として何を意味するかが分かるときがあるが，このような場合に，厳密分析はその語がactual phaseを離脱させるようなはたらきをするかも知れないということを明らかにすることはあり得る。解釈が十分になされることが最大の目的であるから，全体構成の大きな枠のなかにあらわれるそのような語は殆ど問題とされるに値しない。我々がある発話なり，文章なりを理解するということはそれが意味する全体としての概念を分かるということであり，一語一語の意味を間違いなく，厳密に知るということではない。

（II）

前章の終わりの部分にverbal contextと物理的文脈（physical context）の関係を少し見たが，前者は結局根本的には後者に結びついて形成されるのである。我々が発するすべての言語表現はその源は何かと尋ねればphysical phaseに行きつくことは疑いないということである。

子供が言語を獲得して行く過程は上に述べたことを深いつながりがある。子供の思考力は幼いので，視覚や聴覚が言語獲得に際し非常な重要性をもってくる。母親が子供に人形を与え，遊ばせたとき，“doll”という語を覚えるのには格好の状況を与えたことになる。母が“This is a doll.”とか“Play with a doll.”と人形を指しながら言うと，子供は視覚により，母の指し示す方向にある人形を見，そしてそのような動作と同時に発せられる〔dol〕という発音を聴覚によって受け取ることにより，“doll”の物理的実在とその発された音声を結びつけ，〔dol〕という声は人形という意味なのだと知るのである。そして，幼い子供は，人形を探しているときにも，人形が壊れてしまったときにも，“Where is the doll.”とか“The doll has been broken.”と言わずに，“Doll! Doll!”とた

だ口に出したり，泣き叫んだりして，親に知らせる可能性がある。

このように，直接的物理的なもの以外の語を含んでいる長い発話の代わりに，子供が“doll”という語を発するのは，物理的に目で見られるものが，子供にとって覚えやすいということを意味しているのは明白である。これは勿論子供に限られたことではなく，成人にとっても物理的実在がもっとも記憶にとどまり易いということは変わりがないし，それを使うことによって，ものごとが説明されるとき，話がより鮮明に解釈できるということも事実である。

物理的実在は，我々の生活において，外在世界を形成し，意味の面では所謂“extensional meaning”[3]を構成する。これは“intensional meaning”に対するものである。我々の発話はそれらのどちらか，或いは両方を含むかも知れないが，“intensional meaning”をもたない発話というのは無い。我々が何かをことばに出す限り，頭のなかにその“notion”が存在しているからである。一方それに反して，“extensional meaning”をもたない発話はある。しかし，それは奇異な感じがすることを免れない。例えば，“angels watch over my bed at night.”という陳述は“intensional meaning”を有しているが，“extensional meaning”がそれに無い。我々はここで後者が無いというとき，その発話内の“angels”の存在を視覚的にとらえることができたり，それに触れたり，どのような科学的方法によってもそれを確証することができないということを意味している。

extensional meaning を有する物理的実在がコンテクストを形成するものとしてどのようにあらわれるかを見てみよう。物理的実在はコンテクストにおいてそれ自体が意味を持つと共に，先に示したように，他のことがらの解釈や把握を容易にするという役を担う。例えば，野球のよく知らない人がそれに精通している人達と一緒に野球を楽しんでいたとしよう。彼は，審判が“Strike”と叫ぶとき，初めはそれが何を意味するか分からなかったが，彼はバッターの打てそうな球が来たときとか，打者がバットを振ったときに“Strike”が叫ばれるのを聞き，“Strike”とは打者の打てる球とか，バットを振ったときに関係あるのだと先ず考え，徐々にその正確な意味を把握してゆくだろう。“Foul”とい

う語も打者が球を打ったときに，それがプレイング・グラウンドの外側に落ちたときに叫ばれるのを聞き，その意味を獲得するようになるだろう。このとき，"Strike"と"Foul"という語の意味はpysical contexts——pitcher, batter, bat, ball, diamond, plate, etc.—— により理解されるようになったのである。ここでは，恐らく〔straik〕と〔faul〕という音声を除いて明確に目に見える物理的実在しか必要とされない。

"He is like a fountain of wisdom."という発話を聞いたとき，或いは文を見たとき，我々は水が湧き出ている具体的な森の泉を思い浮かべることができる。その時この文はその抽象性にも拘らず容易に理解することができる。前の例では理解しようとする人が，実際に視覚により外的実在を見ることができたが，後者の例では，その場で直接に実在を見ることができないが，それを頭のなかに想起したのである。ここでは，彼がかってその実物を森の中かどこかで或いは絵本で見たり，他人からそれがどんなものであるか聞いたりして，それを知っていることが前提となっている。先程の例は意味が"shift"されたのであり，それ以前の意味を思い起こすことによって，文を理解したということである。

次に，verbal contextとphysical contextが実際の発話場面でどのように関係し合うかを見てみよう。話し手が聞き手に向かって，指さしながら，「そこにある本を取ってくれないか」と言ったとき，それは言語表現として耳に入ってくる。そのとき指差された指がphysical contextとなり，聞き手はその方向を見る。すると机の上に数冊の本が目につくとする。これもまたphysical contextである。そして，彼はそれらの本のどれを話し手が意味したのかと彼の述べたことに基づいて考えるとき，verbal contextについて考えている。ここではそれを含む表現は物理的なもののためのそれであった。もしphysical contextが無ければ，この場合，このような発話はなされなかったであろう。ここに，我々はverbal contextのphysical contextに対する依存性を見ることができる。後者はそれ自体が当に起こっている伝達行為における物理的実在と関係する場合には，必ず前者が後者との関連における要因なのである。

前章で示された“oboe”の例文は純粋に verbal context により成り立つものであったが，もし，あの発話場面で“oboe”がどのようなものであるか知ろうとする人が，その物体を実際に見ることができれば，直ちに理解したことだろう。物体とは具体的であるが故に，それによって形成される physical context もまた具体的である。だが，物体だけの姿がただ存在するだけでは，言語によるコミュニケーションを扱うときに，コンテクストとしての十分な意義を果たしていることにならない。それはことばの世界と関係する存在であってこそ，言語を用いる人間にとって意味あるコンテクストとして機能することができるのである。

（Ⅲ）

次に，psychological context を考察してみよう。この種のコンテクストは人間の特徴を殊更表すものである。なぜなら，それは複雑な精神作用の結果としてあらわれるものだからである。それゆえ，先述した二つのコンテクストと比べると扱うに難しい問題と言えよう。verbal context にしても，physical context にしても，或る発話に関係する要因であることが示されたように，このコンテクストもまたそうである。話者が発話する内容を取り巻く，或いはその基盤となっている彼の精神面がこのコンテクストの鍵である。個々人はそれぞれの心理を有しており，それと共に生起する発話がどのように彼の心と関係があるかということを見てとることは，聞く側が彼の発話の真意を理解するためには欠くべからざることであるのは言うまでもない。

たとえば，ある人が発話者の述べることを聞いているときにも，聞き手が彼の psychological context をよく承知していれば，彼のことばのわずかを聞いて彼の言いたいことを理解できる場合がある。もし話し手の psychological context をよく知らなければ，十分なことばを使ってなされた発話でも不十分にしか理解できない場合がある。この psychological context の一つの特徴は，それが個人の心に関してのコンテクストであるから，それを含む発話はその傾向として個人の感情面と非常に関係がある。客観的問題に対する話しでは，個

人の psychological context が関与するのは，もしその話しの十分な趣旨を伝えたいとそれが発される限りは，まれである。もう一つの特徴は，聞き手としては話し手の心理を感知し，認識するのであるから，心理面の鋭い判断に長けていることが要求される。だが，たとえ心理の微細な面の洞察にすぐれている者でも，相手を恒常的に支配している精神面において言語を用いるときの話し手の性癖を心得ていなければ洞察は難を招くときもある。そういう意味では，聞き手は話し手に関する様々の事柄を日常接していて認識していることが後者の psychological context を知るのに最良と言えるだろう。

冗談を言ったときに，相手がまともに取って腹を立てるときがあるが，その際話し手の psychological context は「それは冗談で言った」ということであり，聞き手はそれを理解していないために不十分な解釈をしたということである。また，この逆の例もあるだろう。通常よく冗談を言う人が，相手に真面目に言ったつもりなのに，後者は冗談と受け取って軽視し，誤解する場合である。このときは，話し手の個人的性格がある特定のコミュニケーションの場面で障害となったということであるが，このように個人に具わっている一般的に性格が聞き手の側の発話理解によくあることである。第一の例でも，めったに冗談を言ったことのない人が，明らかに冗談と分からないようなことを言えば，理解する側は彼の普段の性格に応じて彼の陳述を解釈するのであるから，当然誤解を招くことになる。

このように psychological context は微妙な側面を有しており，広く捉えるならば，相手の発話を理解するということは，個人によって口に出されたその内容を理解するということであるから，人間のそれの理解の条件には必ず psychological context の理解が伴っているということを考えに入れなければならない。それは，psychological context のように目で見たり，verbal context のように耳に聞こえるものでもない。その理解は，それが故に，非常に困難なときもあり，発話させた心理面に関するあらゆることがらを利用しなければならない。物理的な要素，言葉上の要素による感知も必要とされるのは勿論のことである。話し手が発話するときの態度により，目つき，顔つきにより，コン

テクストを知ることができることもあるし，発話の調子がどうであるかによってもそれを知ることができるだろう。

psychological context は発話者自身の心のあらわれであるが，それは彼の発話を取り巻く環境と無関係に起こっているのではない。たとえば，冗談を言いたいような雰囲気を作り出し，そのような気持ちにさせるのは聞き手自身かも知れない。聞き手の性格が冗談を言って，からかい，それを真面目にとって気にかけるようであったなら，話し手はそれを控えることが考えられる。彼をそのとき取り巻く環境が，言いたいことを直接的に表現すると，聞き手の感情を害すので，迂回的に冗談めいて発話することもあるだろう。このように考えてくると，発話者の psychological context を理解するということは，ときには，ことばに直接あらわれた以上のことを察知するということになる。勿論，それは言葉から全く独立して察知されるというのではない。

話し手がどんな人間であるか聞き手にはっきりしていないとき，彼の psychological context を明確に認知できないということを前に述べたが，ある人間のそれをいかなる場面の彼の発話でも，より容易に理解することができるならば，彼の psychological context の一般的傾向を知っているというばかりでなく，彼という人間自体も知っていることになるだろう。人間の心理は変化して止どまらないから，そのことは容易に達し得ることではないが，人間には個人的特質があるように，彼の行う発話の基礎となる psychological context にもある種の傾向が存していると考えるのは間違いではない。

psychological context がもっとも重要性を持つときは，先にも述べたように，発話内容が話し手の感情と深く関係している場合であり，その点で感化的伝達（affective communication）との関わりもつときである。指示的（referential）或いは，情報的（informative）コミュニケーションのときは，そのコンテクストはそれほど問題となることではない。物事の客観的知識とか，事実に関する知識は，それ自体，人間の心理と無関係であるということがそのことを導くのである。“metaphor”，“simile”，“irony”，“humor”などは話し手の psychological context を微妙に表現するものである。また，これらの感化

的伝達に属する型のものでも，それらが公に，或いは多くの人々になされた場合でなく，個人に対してなされた場合の方が，より大きくその種のコンテクストは影響する。

註

(1) Semantics (Greenwood press 1941) p.21

(2) Language in Thought and Action (George Allen Unwin LTD 1952) P.83

(3) cf. The Meaning of Meaning, C.K. Ogden & I.A.Richards. (Routledge Kegan Paul LTD 1923) P.54